「能」に現れた日本人の死生観

角井　宏

1。「能（のう）」の宗教性

「能」は、６００年の歴史をもつ日本独特の伝統芸能である。「能」の、芸能としての特色は、その所作においても、脚本においても、一般芸能が志向する写実化とはおよそ正反対の、抽象化・様式化・高尚化・教養化に徹していることであり、そのため現代の日本人には俗受けしない傾向がある。しかし、それだけにその奥深い精神性・文化性が教養人の心を捕えて離さない魅力となっており、６００年の命脈を保った秘密もそこにあるということができよう。

ドナルド・キーン教授によれば、日本の能を西洋に紹介した最初の外国人は、１６世紀におけるキリスト教のポルトガル人宣教師であって、ローマ法王庁への報告に「能は、一種の宗教劇で、仏教の普及に大きく貢献している。キリスト教もこれに学ぶべきである。」と報告しているそうである。

たしかに、能のストーリーには、「勧善懲悪（かんぜんちょうあく）とか、「因果応報（いんがおうほう）」とか「輪廻転生（りんねてんしょう）」とか仏教の教義に立脚するものが少なくないし、霊界との交流を扱ったものもあり、劇の導入部を担当するワキ（脇役）は、仏教の僧侶であることが多い。それ故、仏教との関係を否定するわけにはいかないが、いわゆる宗教劇のように専ら特定の宗教の普及のために創られたものではない。このことは、以下の事実によって立証できる。

第一に能の筋書を書いた謡曲には、唐の元宗皇帝の新年会の模様を写しただけの「鶴亀（つるかめ）」や、五条の橋の上での弁慶と義経の出合いを書いた「橋弁慶（はしべんけい）」や、宮中の歌合わせに歌集を洗って、古歌であると主張する大伴黒主の陰謀を暴く小野小町の知恵を描いた「草子洗（そうしあらい）」など仏教教義とは全く無関係の物語が少なくない。（俊寛・小督・鉢木・白楽天・花筐も然り）

第二に能には霊界との交流が全くなく、現世の交渉を書いた「橋弁慶」や、鬼界ケ島における３人の流人のうち唯一人大赦に洩れた俊寛の

悲嘆を扱った「俊寛（しゅんかん）」や、俗曲「黒田節」の第２節を構成する爪音高き「想夫恋（そうふれん）」を奏する「小督（こごう）」や、「戸塚の坂で二度ころび」の川柳で有名な「鉢木（はちのき）」など霊界との交渉をまったく扱っていない曲が沢山ある。

第三にワキも必ずしも僧侶ではない。白楽天自身がワキになり、住吉明神とかけあう「白楽天（はくらくてん）」、青年高風がワキの「猩々（しょうじょう）」、阿蘇神社の神官がワキを務める「高砂（たかさご）」、道教の方士がワキの「楊貴妃（ようきひ）」のほか、蟬丸（せみまる）・熊野（ゆや）・竹生島（ちくぶしま）・安宅（あたか）・土蜘蛛（つちぐも）・景清（かげきよ）・菊慈童（きくじどう）・紅葉狩（もみじがり）・隅田川（すみだがわ）・砧（きぬた）のようにワキが僧侶でない曲はいくらでもある。

つまり、能は、宗教劇というより日本文化そのものなのであり、そこに現れる僧侶や教義も日本文化に投影した仏教の影に過ぎない。つまり、僧侶でなくても、神主でも、方士でもよいので、配役は、すべて日本人の死生観や倫理観に基いて行動しているように思われる。もっとも、日本仏教は真の仏教ではなく、日本教だという説もある。例えば国際日本文化研究センター所長の梅原猛氏は、本来の仏教なら、神仏混合などの二重信仰が生れる筈はなく、二重信仰や浄土思想は、日本の縄文時代からの祖先崇拝を主軸とする信仰（多神教）にねざすものであると主張しておられる。（参考文献　梅原猛著「日本人の魂」）

２。能を通じて見る日本人の現生観

能のストーリーの多くは、平安時代以降の物語であるが、この時期の日本人の死生観や倫理観は、当時栄えた浄土信仰＝来世欣求（らいせごんぐ）の思想に導かれている部分が多く、現世無常なるが故に来世の極楽を願って精進努力するし、愛する死者のために、あるいは死者の鎮魂のために供養（くよう）するのである。

現生が人間の魂の進歩にとってどのような意味をもつか、この肉体から離脱した来世の人間の魂がどのように生命を持続するのかを比較的明

確にあらわした謡曲に「蟬丸（せみまる）」がある。盲目の故に山に捨てられた皇子蟬丸の運命を憐む従者清貫（きよつら）の慰めに対して蟬丸は次のように答えている。「あら愚かの清貫が言ひ事やな。もとより盲目の身と生まるゝ事。前生（ぜんせ）の戒行（かいぎょう）拙き故なり。されば父帝も山野に捨てさせ給ふ事。御情なきには似たれども。この世にて過去の業障（ごうしょう）を果し。後の世を済けんとの御謀。これこそ真の親の慈悲よ。あら嘆くまじの勅諚やな」

ここには、人間の生が現世で終るものではなくて、前世の行の結果として現世があり、現世の行の結果として来世があるという生の連続性＝霊魂の不滅への信仰が見られる。しかし、前世や来世と現世がどのように異り、現世がどのような特徴をもつのか。肉体に備わる五感を生かし、理性に依拠した神への接近－絶間なき進歩や精神的向上を図るというような現世の目的を明らかにした曲は見当たらない。現世におけるどのような努力が来世の幸福をもたらすのか、謡曲では必ずしもあきらかではないように思われる。

しかし、謡曲において生者に祈りを求める死者は多いし（通小町かよいこまち・卒都婆小町そとばこまち・藤戸ふじと）、逆に死者のために祈る生者の物語は、きわめて多い（敦盛あつもり・井筒いづつ）。　これは、死者の怨念やたたりを恐れて祈るという見方もできるが、死者の成仏を妨げる前世の怨念を鎮め、死後の生に恩寵を期待して祈禱し、法会を催し、寺院を建立する。また、このような怨念に対抗する法力への期待が語られているものも少なくない（通小町・卒都婆小町・舟弁慶ふなべんけい）。

仏教諸派のうちには輪廻転生の世界について六道といって、極楽・地獄のほか、人間・修羅・畜生・餓鬼を挙げるものがあり、謡曲にもこれらの用語を用いた例はある。しかし、この転生がどのように行われるかを明確にしている曲は見当らないように思う。ただ、死して極楽往生を遂げることができず、修羅・畜生・餓鬼の苦患を受ける者は、飲酒・邪淫・妄語などの破戒をなした者である（紅葉狩）。とりわけ、殺生戒を犯した者の苦患は厳しく、中でも殺生を楽しんだ者は、激しい苦患に悩

まされる（鵜飼うかい、求塚もとめづか）。

3。経正の管弦講

謡曲「経正つねまさ」の主人公経正は、西海の合戦で戦死した武将であるが、琵琶の師が経正の霊を弔うため、琵琶を供えて、管弦講の法会を実施する。すると経正の声があって、「御弔ひの有難さに。これまで現れ参りたり」しかし、姿は見えず、「そも経正の幽霊と答うる方を見んとすればまた消え消えと形もなくて。声はかすかに絶え残って。正しく見えつる人影の。あるかと見れば。また見えもせで。あるか。なきかに。陽炎（かげろう）の。」「形は見えぬ妄執の生をこそ隔つれどもわれは人を見るものを」「不思議やな経正の幽霊形は消え声は残って。なおも言葉を交しけるぞや」「人には見えぬものながら手向けの琵琶（青山せいざん）を調むれば」というわけで、他人からは見えないが、発声も演奏もできる存在として描写されている。

殺生戒を破った経正は、「修羅の苦患くげん」を受ける。この修羅の苦患とは、日に三度帝釈天と戦って修羅の責苦を受けることであって、この管弦講を楽しむ経正の幽霊も刻限至れば、姿さえ暴露され、早々に立ち去ることを余儀なくされる。そのさまを謡曲「経正」は、次のように述べている。

「あら恨めしや」「また瞋恚（しんい）の起こる恨めしや」「はや人々に見えけるぞや」「帝釈修羅（たいしゃく・しゅら）の戦は火を散らして瞋恚の猛火（みょうか）は雨となって身にかかれば。払う剣は他を悩まし、我と身を斬る。紅波（こうは）は却て猛火となれば。身を焼く苦患（くげん）。恥づかしや。」

4。二種回帰

浄土教では、往相回帰と還相回帰とがあり、後者はこの世に魂魄が帰ってくる姿であるが、罪深き者は、二種ともに遅々として進まぬ点で善徳者と異なるという。この点前掲梅原説の「あの世」でも同様で、善行を積んだ者は速やかにこの世に復帰すると説いておられる。しかし、これを活写した謡曲は見当らない。